

二〇二三年度入学選抜試験問題

国語

(六〇分)

問題は□から■まで(18ページ)ある。

解答は、すべて別紙の解答欄に記入すること。

文字は正しくていねいに書くこと。

句読点も一字に数える。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

僕はNHKのBSで『COOL JAPAN』というテレビ番組の司会をしています。日本に来て時間のたっていない一般外国人をゲストに、日本のさまざまなものをCOOL(かっこいい)か、かっこよくないか、あれこれと話すNHKらしいバラエティー番組です。

日本に来て、まだ1ヵ月たっていないというフランス人の出演者が、番組が始まる前に、興奮した顔で僕に話しかけてきました。

「先週、電車の中にバッグを忘れたんです。もう、悲しくて、その話を日本人の友人にしたら、すぐにJRに電話すると言っています。そんなバカな¹と思ったら、僕のバッグは、置き忘れた網棚の場所に、そのままあったんです！」

彼は、目を大きく見開き、信じられないという顔をしました。

「フランスなら、間違いなくバッグはなくなっています。いえ、ヨーロッパなら、どこでもそうでしょう。持ち主が近くにいないと分かると、すぐに誰かが盗んでいくんです。日本人はなんてマナーがいいんでしょう！ これは奇跡です！」

興奮した早口の英語を聞きながら(番組の共通言語は英語ですから)、僕はずっと微笑^{ほほえ}んでいました。日本人として、日本をほめられるのは、何にしても嬉しい^{うれ}いものです。

電車は東京の山手線のようにでした。ぐるぐると回り、大勢の乗客が降りしている電車に、そのままバッグが残っていたことに、彼は本当に衝撃を受けたようでした。

が、2週間後、次の収録の時、彼は困惑した顔で僕の前に現れました。

「今日、電車に乗っていたら、杖^{つえ}をついたお年寄りが乗ってきたんです。彼女は、プライオリティーシート(優先席)の前に立っただけで、座っている日本人は誰も彼女と席を替わろうとしないんです。みんな、下を向いたり、平気な顔で携帯電話をいじりながら座ってるんです。フランスなら、いや、ヨーロッパならどの国でも、すぐに誰かが立って彼女を座らせてあげ

ますよ。杖をついているお年寄りを立たせるなんて信じられない！

昨日はね、階段を女性が乳母車うばを抱えて降りてたんです。でも、誰も手を貸さないんですよ。彼女は必死に、赤ん坊が乗った乳母車を一人で下ろしてるんです。いったい、この国のマナーはどうなっているんですか!？」

彼は、本当に理解できないという顔をしました。2週間前、この国のマナーを絶賛しただけに、本当に戸惑っているようでした。

日本人だって席は譲るよ、とあなたは思うでしょうか？

欧米に旅行したり、住んだりした人は、欧米の人たちが、素早く席を譲ったり、乳母車の手助けを自然にすることに驚いた経験が一度や二度はあると思います。

イギリスの地下鉄に乗っている時、モヒカンヘアー*のバンクファッションの若者が、老人にサラリと席を譲った風景は衝撃でした。

思わず、「お前の反体制のポリシー*はどうなるんだ？」と、耳にじゃらりとピアスを並べ、びょう鉦が打たれた革ジャンを着ている若者に聞きたくなりました。

そんなバンク野郎が、照れるわけでもなく、ふてくされるわけでもなく、じつに自然に席を立つのです。それは、2不思議な光景2でした。

それ以来、僕は、日本と海外の席を譲る割合のようなものに妙に敏感になりました。

欧米の平均は、80%を超えていると思います。目の前に老人が立てば、8割以上の確率で、欧米人は席を譲ります。

日本は、5割を切っていると思います。老人が目の前に立っていても、半分以上の場合、日本人は席を譲りません。

まして、階段を一人で乳母車を抱えて降りていく母親に「持ちましようか？」と声をかけて助ける日本人の割合は、1割以下だと思えます。欧米だと、これも8割以上の人が、自然に手を貸します。

と書きながら、僕たちは、マナーの悪い国に住んでいるのでしょうか？

そんなことはないと思います。現に、フランス人の彼は、2週間前は絶賛していたのです。そうです。彼の話に戻ります。彼は、困惑していたのです。

「日本人はマナーがいいのか悪いのか、さっぱり分かりません！」

あなたなら、なんと答えますか？

そもそも『COOL JAPAN』という番組は、こういう日本人と外国人の意識の違いを見つけ、考え、楽しむ内容なのです。

僕は、しばらく考えました。

そして、じつは、網棚に残ったバッグも、席を譲らない日本人も、同じ理由から生まれているんじゃないかと、結論したのです。

日本人は同じ理由から、正反対のマナーだと思われる行動を取っているんじゃないか。それは、以下のようなエピソードに思い当たったからです。

電車で、たまにおばさんたちの団体さんにソウグウ^①します。おばさんのうち、すごく元気な人が、まず車内に飛び込み、座席を人数分、確保します。そして、後からやってくる人に「ほら、ここ！ 取ったわよ！」と叫びます。

席を取ったおばさんは、他の乗客が席の近くに来てても、当然のように無視して、自分の仲間を待ちます。仲間が遅れていて、他の人たちが戸惑った顔や、ちよつと怒った顔で空いている席を見ている、そんな視線をまったく気にしないかのよう、自分が取った席は、自分の仲間たちの席だと確信しているのです。

席を取ったおばさんにとって、席のそばに立っている学生だったり、親子連れだったりする人たちは、存在しないのでしよう。存在しているのは、自分の仲間たちだけです。

そういう時、なかなかやって来ない仲間のためにぽつんと空いた席の前に僕は立ちながら、けれど、同じ日本人だからこそ

おばさんの心情がよく分かります。

おばさんは、決して、マナーが悪いのではないのです。それどころか、仲間思いのとても親切な人はずです。困っている仲間がいれば、きっと、親身になって相談に応じたりしているのでしょう。

おばさんは、自分に関係のある世界と関係のない世界を、きっぱりと分けているだけです。それも、たぶん、無意識に。電車でのことをずっと考えていて、このおばさんの例を思い出しました。

おばさんは、自分に関係のある世界では、親切でおせっかいな人はずです。そして、自分とは関係のない世界に対しては、存在していないかのように関心がないのです。

この、自分に関係のある世界のことを、「世間」と呼ぶのだと思います。

そして、自分に関係のない世界のことを、「社会」と呼ぶのです。

おばさんは、「Ⅰ」に関心があっても、「Ⅱ」には関心がないのです。そして、自分の「Ⅲ」に属している人のためには必死で走り、電車の席を確保するのです。

でも、「Ⅳ」に属する人たちには、おばさんは、必死になにかをする必要は感じないのです。「すみませんね。ここは、あたしたちの席なんです」と微笑みながら断る人もいれば、まったく関心がないように無表情のまま無視する人もいます。

そう考えれば、網棚に残されたバッグと、優先席で席を立たない日本人は、同じ原理Ⅱルールで動いているということが分かります。

ほとんどの日本人にとって、網棚に残されたバッグは、自分とは関係のない世界Ⅱ「社会」なのです。

同じく、目の前に立っている杖をついた老女もまた、関係のない世界Ⅱ「社会」なのです。

関係のない世界だから、存在しないと無視したのです。それが、網棚のバッグなら、「盗みのない奇跡のモラル」になり、優先席の場合なら、「足の悪い人を立たせている最悪のマナー」になるのです。

これは、いきなりの結論ですから、もちろん、今から「世間」と「社会」について、詳しく書いていきます。

ただ、今、思っているのは、「世間」と「社会」という視点で見れば、³この国のかたちは、ずいぶん分かりやすくなるんじゃないかということです。

そして、「空気」の正体も、明確になると思っています。

ちなみに、電車の中で、熱心にお化粧をする女性は、そこが「社会」で、自分には関係がないと思っ
ているからできるのだ
と思います。もし、一人でも、会社②のドウリヨウ④が乗り合わせて来たら、彼女は今まで通りには化粧は続けられないはずで
す。「社会」しかなかった空間に、「世間」が現れたからです。

ここで、「世間」を考える時に、すべての基本になるであろう歴史学者阿部謹也きんやさんの著作から、「世間」とはどういう特徴
があるのか確認してみようと思います。

阿部さんは、2006年9月に亡くなりましたが、『世間』とは何か（講談社現代新書）、『日本社会で生きるとい
うこと』（朝日新聞社）、『学問と「世間」』（岩波新書）など、膨大な著作で、「世間」の正体を突き止めようと格闘を続けてこられた
人です。

まず、阿部さんは、『世間』とは何かの中で、「社会」と「個人」についてこう書かれています。

明治十年（一八七七）頃に society の訳語として社会という言葉がつけられた。そして同十七年頃に individual の訳語とし
て個人という言葉が定着した。それ以前にはわが国には社会という言葉も個人という言葉もなかったのである。ということ
は、わが国にはそれ以前には、現在のような意味の社会という概念も個人という概念もなかったことを意味している。

では、どうして今までなかった「社会」や「個人」という単語を、^③発明しなければいけなかったかということ、富国強兵政
策の名のもと、わが国を強引に西洋化する過程で、国会や裁判所などの政府キコウ、^③税制、教育、軍制などの概念を国民に説

明するためには、「社会」「個人」という単語が必要だったからです。

阿部さんは続けます。

欧米の社会という言葉は本来個人がつくる社会を意味しており、個人がゼンテイ^④であった。しかしわが国では個人という概念は訳語としてできたものの、その内容は欧米の個人とは似ても似つかないものであった。欧米の意味での個人が生まれていないのに社会という言葉が通用するようになってから、少なくとも文章のうえではあたかも欧米流の社会があるかのようなゲンソウ^⑤が生まれたのである。特に大学や新聞などのマスコミにおいて社会という言葉が一般的に用いられるようになり、わが国における社会の未成熟あるいは特異なあり方が覆い隠されるといふ事態になったのである。しかし、学者や新聞人を別にすれば、一般の人々はそれほど鈍感ではなかった。人々は社会という言葉あまり使わず、日常会話の世界では相変わらず世間という言葉を使い続けたのである。

「社会」という言葉が定着しなかった結果、「そんなことをしたら世間が許さない」「世間体が悪い」という言い方は残っても、「社会が許さない」とか「社会体が悪い」という言い方は生まれなかった、ということ⁵です。

そして、阿部さんは、建前としての「社会」と本音としての「世間」が日本に生まれたとします。

阿部さんは膨大な書籍を著していて、繰り返し、「世間」と「社会」、そして「個人」について書かれています。

僕なりに阿部さんの言葉を要約すると――。

日本の「個人」は、「世間」の中に生きる個人であって、西洋的な「個人」など日本には存在しないのです。そして、もちろん、独立した「個人」が構成する「社会」なんてものも、日本にはないんだと言うのです。

日本人は、「社会」と「世間」を使い分けながら、いわば、ダブルスタンダード(二重基準)の世界で生きてきたのです。

(鴻上尚史『空気』と『世間』による)

【注】 *モヒカンヘア―頭髪の中間部分だけを残す髪型。

*ポリシー―方針、政策。

*パンクファッション―奇抜なファッション。

問一 ――線部①～⑤のカタカナを漢字に改めよ。

問二 ――線部1「そんなバカな」とあるが、そう思ったのはなぜか。説明せよ。

問三 ――線部2「不思議な光景」とあるが、どのような点が「不思議」なのか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 攻撃的にも見える格好をしているのに、弱者に対して親切にふるまう点。

イ 権力者には批判的な姿勢をとっているのに、他者の弱点には目をつぶる点。

ウ 自分自身を傷つけるファッションをしているのに、他者に危害を加えない点。

エ 不真面目な服装を身につけているのに、周囲の人には真面目なふりをする点。

問四 空欄 I Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ に入れるのに適切な語

句は、A「世間」・B「社会」のどちらか。それぞれ記号で答えよ。

問五 ――線部3「この国のかたち」とは、具体的にどういうことを表しているのか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 日本人の行動の禁止事項。

イ 日本人の行動の真実と嘘。

ウ 日本人の行動の決まり、原則。

エ 日本人の行動の歴史的成り立ち。

問六 — 線部 4「彼女は今まで通りには化粧は続けられないはずです」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア おどおどしている気持ち、知り合いに見抜かれるから。

イ 隠しておきたい自分の秘密を、知り合いに真似されるから。

ウ 自分では悪いと思っていない行動を、知り合いに責められるから。

エ 本来人に見せるものではない行為を、知り合いには見られたくないから。

問七 — 線部 5「社会が許さない」とか「社会体が悪い」という言い方は生まれなかった」とあるが、どうしてこのような表現が生まれなかったのか。説明せよ。

このような表現が生まれなかったのか。説明せよ。

問八 ……線部「同じ理由」とあるが、それは何か。文章全体から考えてまとめよ。

体から考えてまとめよ。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「遠藤くん、それ彼女？」

黙ったままでいたら、急に声をかけられた。背筋が凍りつく。広瀬先輩が目を細めながら、私たちの顔を覗きこんでくる。

「……うっせ、関係ねーだろ」という遠藤の声は、頼りないくらい小さかった。「ふうん」とたつぷり息を吹き込んで言う広瀬先輩が、今度は私を見た。冷たい声で言う。

「挨拶は？ 二年」

「……さよう、なら」

声がつまった。自分がどんな顔をしているか、まったくわからなかった。遠藤に引っぱられるように、早足になって歩く。背後で、広瀬先輩がわざとらしい口調で何か叫ぶのが聞こえた。頭の中が真っ白で、内容をきちんと理解するのが遅れる。

「ごめんな」と遠藤が言うのと、広瀬先輩の声を思い出すのが同時だった。

「むっかつく！」と力任せに言ったあの声は、きつと宣言だった。

どうなっちゃうんだろう。私、多分、しめられる。

学校に行くのが憂鬱で、裕香たちから「気にすることないよ」って言われても、私の不安は治まらなかった。広瀬先輩と同じバレー部の子たちが、入部してすぐの春、毎日部活の後一人一人トイレに呼び出された話や、彼女が何をすれば喜び、どうすれば怒らせずに済むかの、いまさら遅い「広瀬先輩攻略法」なんかを教えてくれたけど、聞けば聞くほど、かえって私の胸は圧迫されるようだった。

裕香たちが、そんなモンスターのな広瀬先輩と敵対してる私のことを、心配しながらも、すごーいって目で見て、それを自分の自慢話のように他のクラスの子に吹聴ふかちやうすることもわかって、

I

もした。(中略)

ある日、夕ご飯を終えてお姉ちゃんが部屋に戻ってしまった後、テレビを観ていたら母に尋ねられた。

「ねえ、最近どう？」

「何が」

私が元気ないことに気づいたのか。背筋を伸ばして顔を向ける。お母さん、気づいてくれたの？ だけど、母が続けた言葉は私を落胆させた。

「お姉ちゃん、元気ないと思わない？ 今日、スーパーで買い物したら、お姉ちゃんの担任の先生と偶然会って」

「は？ 知らないよ。そんなの」

何だよ、私の話じゃないのかよ。お茶を淹れた母が、私の前にも湯呑みを置く。

「聞いたら、あの子、友達とケンカしたみたいなのよ。学校でも一人でいるみたい。そういえば最近、お姉ちゃんあての電話がほとんどかかってこないし。亜季、学校でお姉ちゃんのこと、見かけない？ 気づかなかった？」

「たまに見かけるけど、わかんない。っていうか、ケンカって何？ お姉ちゃんの友達なんて、みんなおとなしくて穏やかそうじゃん。あんな草食動物っぽい子たちから、外されてるってこと？」

三つ編み軍団が内部分裂するところなんて想像つかなかった。男問題で揉めることなんか絶対ないだろうし、だいたいあんな子たちからさえ外されてしまうなんて、情けない気がした。

II

来ない。

母がため息をつく。

「わかんないのよ。由紀枝は強い子だから、何かあっても我慢して言っってこないし。心配で」

「私の方が強いよ」

1 「あなたの強さとはまた別。お姉ちゃんの方が強いわよ。なおのことかわいいそう」

かちんときた。湯気を立てるお茶を一口も飲まずに居間を出て、あてつけるように乱暴に襖ふすまを引く。部屋に戻ると、由紀枝は机に座って本を読んでいた。音楽も聴かず、私の方を見もしない。

外されてるってこと？

自分で口にした言葉を「反芻する」。

お姉ちゃん、と声が出かかって、だけど呑み込む。何をどう聞けばいいかわかんなかった。一人で教室を移動する、一人でトイレに行く。想像して、III する。私だったら絶対嫌だし、耐えられない。

^A どうしてそんなに要領が悪いの。

いたたまれない気持ちで机に座る。私が巻き込まれてる激しさに比べたら、遙かに地味な問題には違いないけど、姉も姉の世界の中で難破なんぱしかかかってる。立場、代わってくんないかな。私だったら、あんなさえないブスたち、一笑に付しておしまいで済むのに。

意識してみると、由紀枝は一人でした。

理解できないのは、自分を外したヤツらと顔を合わせなきゃならないような部活にまで律儀に出続けてるらしいってこと。マラソンとか、球技大会の時みたいに棄権したがいればいいのに、離れた場所に座る自分の元友達がひそひそ陰口言うのを、本を読むふりして全部聞いている。

自慢げなところが気に食わない、と三つ編み軍団から噂うわさされてるらしいって、どこから聞いた。多分、成績のことだ。

いよいよ受験が迫って、みんな神経が過敏になってるのかもしれない。地味な子とばかり付き合ってるせいで、由紀枝はきつと得意になってしまったのだ。人生馴なれしてないから、処世術もわからない。もどかしく、嫌になる。かわいくないならそれなりに、せめて謙虚にしてなきゃダメなのに。本当に姉は不器用に貧乏くじばかり引く。

一週間が経ち、二週間が経っても、私は不思議と広瀬先輩から呼び出しを受けることはなかった。内心のビクビクが随分落ち着き、今週末はいよいよ遠藤とセブクラのライブって時になって、裕香が「大変たいへーん」と声を上げながら、私のところに来てきた。

「どうしたの？」

「三年の先輩に聞いちゃった。亜季のお姉ちゃん、広瀬先輩とケンカしたんだって」

驚きすぎて、声が出なかった。意味がわからずに目を見開く。金魚のようにぱくぱく口が動いた。漫画みただけど本当にそうだった。ようやく声が出る。

「……いつ？」

「もう結構前だって。掃除の時間、広瀬先輩が亜季のお姉ちゃんに因縁いんねんつけるとこ、私の部活の先輩が見たって」

「因縁って、何言ってたの」

「わかんない。最初にふっかけたの広瀬先輩だっただけけど、それに亜季のお姉ちゃんが何か言い返して。最後、広瀬先輩が『うっせえよ、友達いなくせに』ってキレてたって」

姉は、今もまだ三つ編み軍団からの除名真つ最中のはずだ。そのことを私も母も気にしていることに気づいて、最近の家ですら口数が減った。人間は、相手が一番気にしていることを本能的に察して罵る生き物だし、広瀬先輩なんて特にそのエキスパートみたいな人だ。

姉は傷ついたはずだ。だけど、振り返ってみても、昨日もその前も、姉は私の前でおかしな素振りを全然見せなかった。広瀬先輩のことなんて、おくびにも出さなかった。

裕香が心配そうに私の顔を覗きこむ。

「ねえ、お姉ちゃん、何か言ってたなかった？ 広瀬先輩、ひよっとして亜季のことでお姉ちゃんに」

「わかんない」

それ以上続けて欲しくなかった。頭がぐちゃぐちゃ混乱した。どうしてよ、どうしてよ、お姉ちゃん。何にも言ってたなかった。何で広瀬先輩に対抗したりするのだ。どうして要領よくやらないんだ。しかも、責任が私にあるのかもしれないって考えると、具合が悪くなりそうだった。私と由紀枝は関係ないのに。

家に帰り、由紀枝にそれを問いかけるのは勇氣がいった。今まで経験したことないくらい気まずかった。おかえり・ただいまの簡単な挨拶すら、最近じゃ交わすことが稀まれだったのだ。

「——どうして、広瀬先輩とケンカしたの」

尋ねると、姉がゆつくりと私を見た。特段驚いた様子も、気まずそうな様子も見られなかった。ごく自然にこつちを見た視線に、射すくめられたように動けなくなる。もう一度、今度は言葉をかえて聞いた。

²「何で、私をかばったの」

「わかんない」

姉が薄く微笑んでいた。恩に着せる様子もなく、いたって静かに。

それを見た途端、すとん、と急に理解した。私はどうしようもなく妹なのだ。

「話、それだけ？」

姉が聞く声に、私は衝撃に打たれたままこくと頷いた。「気にしなくていいよ」と、姉が重ねて言った。

「広瀬さんとはもう何もないし。亜季、気にしなくていいよ」

気になんかしてない。

答えようとした強がりが、喉にひっかかって言えなかった。何をどう伝えればいいのか、一つも言葉が浮かばずに、黙ったまま座った。これまで広瀬先輩に怯えてた恐怖から解放された安堵あんどと、姉の肩に自分が押し付けたものと、姉が今考えてることとが、順番に頭を駆け巡り、それらが私の喉をカラカラに干上がらせた。

「お姉ちゃん、友達とうまくいってないの」という問かけが口を突いたのは、混乱のせいだと思えなかった。姉がまた私を見つめた。声を出していなければ、震えて涙が出そうだった。

「何があったの」

できることなら、すべて話して欲しかった。私にやらせて欲しい。あのさえない地味な軍団を笑ってバカにしろというな

ら、私がやりにいく。どれだけでも口汚い言葉で罵ることが出来る。私、あの人たちは得意だ。

「私が悪いんだ」と姉が答え、それにより、私からは、本当にもう話す言葉がみんな奪われた。

「心配かけてた？」

たいしたことではないように、由紀枝が言う。

週末のセブンス・クライシスのライブに行く途中のことだった。

遠藤との初デート、会場に向かう道のり。広瀬先輩のことは、もう話題に出なかった。

姉とはあれきり、何も話していなかった。朝、どこかに出かける風だったが、お互いに言葉は交わさず、別々の時間帯に家を出た。一人で図書館にでも行くのかと思っていたら、会場のある駅を出てすぐ、近場のデパートの前で三つ編み軍団が勢ぞろいしているのが見えた。中に姉の姿もあるのを見つけ、目を瞬く。遠く離れた場所から不自然にならない程度に観察する。険悪なムードはなかった。ケンカ前と同じように、笑って語り合っている。肩から力が抜ける。家にとって返して、母に報告したい衝動に駆られる。お母さん、お姉ちゃん、仲直りしたみたい。

X

して、今にも

その時だった。

「ああいうグループって、何が楽しくて生きてるんだろな」

瞬きするのまばたも、息を吸うのまも、一瞬忘れた。首が石のように固まって、すぐには声の方向を見ることができなかった。藤が続ける。

「山下の姉ちゃんさ、少しはお前4のこと見習えばいいのにな。勉強ばっかじゃなくて、世の中、もっと楽しいことあるし。だいたいさ、部活、アニメイラスト部なんだって？」

お姉ちゃんが笑いながら、楽しそうに友達とデパートの中に消えていく。休みの日だって普段と変わらない眼鏡とお下げ姿。だけど、提げた鞆かばんに大きなハート形のキーホルダーをつけていた。普段、学校にはつけていけない。休みだから、友達

と一緒だから、オシャレしてるんだ。思ったら、胸がぎゅーつとなった。

私の姉でなければ、遠藤の視線は、あの一団を簡単にスルーしたはずだ。目を留めたのは、私のせいだ。姉たちが楽しそうなのが、見ていてつらくなる。軽い声を、もう返せなかった。

「いい高校入ったって、大学入ったって、あとは普通のサラリーマンになって終わりだろ？——だいたいさ、中学のうちに運動部入ってなきや絶対損だって。先輩との上下関係とか人間関係とか、そういうキホンが IV 抜けたまますぐ受験ってどうなの？ それと」

「遠藤、ごめん！」

大声が出ていた。驚いたように口をつぐんだ遠藤が目をまん丸にしてこっちを見た。

女の子みたいにサラサラな髪した芸能人より、現実のスポーツ刈り男子と付き合う。それが現実の幸せ。遠藤、かっこいい。わかってるけど、全部忘れた。来る途中、何度も鞆の中にきちんと入ってるかチェックしたチケット。袋のまま、取り出して遠藤の胸に押しつける。

「ごめん、一人で行って。私、行けない」

「え？ おい」

「部活、サボらしてごめん。だけど、無理」

遠藤の顔色が変わったことがわかったけど、隣にいたくなかった。タカユキの歌声、バースデイイベント、はかり秤にかける。でも、⁵遠藤の横にこのまま平然と座れるとは思わなかった。

駅の方角まで、夢中で走った。どこに行くのかわかんないけど、進むまま足を出し続けるしかなかった。

ごめん、と歯を食いしばる。

友達と楽しそうに話してた由紀枝。

ごめん。巻き込んでごめん。

(辻村深月『妹』という祝福)による)

問一 空欄 **I** Ⅰ **IV** に入れるのに最も適切

なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア うんざり イ げんなり

ウ ごつそり エ しつくり

問二 ——線部 1「あなたの強さとはまた別」とあるが、亜

季とは異なる由紀枝の「強さ」とはどのようなものか。

説明せよ。

問三 ——線部 2「何で、私をかばったの」とあるが、どう

して最初にこのように聞かなかったのか。その理由と

して最も適切なものを次の中から選び、記号で答え

よ。

ア 姉はいつも本心を人に話さないのので聞いても無駄

だと思ったから。

イ 姉がケンカしたのは自分をかばったためとは思

たくなかったから。

ウ 姉とはこのごろ言葉を交わすことが稀なので通じ

るとは思わなかったから。

エ 姉には自分がケンカの真相を知っていることを隠
した方がよいと思ったから。

問四 ——線部 3「私が悪いんだ」とあるが、なぜ由紀枝は

「私」に対してこのような答え方をしたのか。説明せ

よ。

問五 空欄 **X** に入れるのに最も適切なものを次の

中から選び、記号で答えよ。

ア 安心 イ 興奮 ウ 失望 エ 動揺

問六 ——線部 4「少しはお前のこと見習えばいいのにな」

とあるが、遠藤は由紀枝をどのような人物ととらえて

いるか。説明せよ。

問七 ——線部 5「遠藤の横にこのまま平然と座れるとは

思わなかった」とあるが、それはなぜか。~~~~線部 A

「どうしてそんなに要領が悪いの」と、~~~~線部 B「ど

うして要領よくやらないんだ」に込められた「私」の心

情の変化を踏まえて、説明せよ。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

禪師、尊像を造らむがために、京に上る。財を売りてすでに金丹*^{きんたん}などの物を買ひ得たり。還りて難波*^{なんば}の津にいたりし時に、海辺の人、大亀を四口*^{しこう}売る。禪師、人に勧めて買ひて放たしむ。すなはち人の舟を借りて、童子を二人あて、共に乗りて海をわたる。日暮れ夜ふけぬ。舟人1、欲を起し、備前の骨嶋*^{ほねじま}のあたりに行きいたり、童子らを取り、人を海の中に擲なげき。しかる後に、禪師に告げて云はく、「すみやかに海に入るべし」といふ。師、教化*^{けうか}すといへども、賊猶なほし許なさず。ここにおいて、願ねがいをおこして海中に入る。水、腰に及ぶ時に、石の脚に当りたるをもちて、その暁あかつきに見れば、亀の負へるなりけり。その備中*^{びちゆう}の海の浦海うらうみのあたりにして、その亀三たびうなづきて去る。疑はくは、これ放てる亀の恩を報ぜらむならむかと。

時に賊ら六人、その寺に金丹*^{きんたん}を売る。檀越先*^{だんごち}によぎり、量り贖あかひ、禪師、後より出でて見る。賊らたちまちに退進2を知らず。禪師あはれびて刑罰を加へず。仏を造り、塔をかざりて、供養すでにをはる。後には海辺にとどまり、来れる人きたを化す。春秋八十有余にしてを3はりぬ。畜生4すら猶し恩を忘れずして恩を返報せり。いかにいはむや、ひとにして恩を忘れむや。

(『日本霊異記』による)

【注】

* 金丹 〓 仏像に貼る金箔きんぱくや朱の顔料。非常に高価。

* 難波 〓 大阪府。

* 四口 〓 四匹。

* 備前の骨嶋 〓 岡山県の東部にある島の名前。

* 教化す 〓 説得する。

* 備中 〓 岡山県の西部。

* 檀越先によがり、量り贖ひ 〓 寺の支援者が、先に来て値段の交渉をして。

問一 ——線部1「舟人、欲を起し」とあるが、「舟人」の

「欲」とはどのようなものか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 大きな亀を売りたいという欲。

イ 童子を船から落としたいという欲。

ウ 塔を建てて人々を供養したいという欲。

エ 乗客から高価なものを奪いたいという欲。

問二 ——線部2「賊らたちまちに退進を知らず」とある

が、盗賊たちが驚いたのはなぜか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 失ったはずの金丹が、売り物になって目の前にあつたから。

イ 売り払ったはずの亀が、逃げ出して泳いでいたのを見たから。

ウ 海中に入らせたはずの禪師が、生きていて目の前にいるから。

エ 塔にかざったはずの仏像が、海辺に出て人々に説法をしていたから。

問三 ——線部3「をはりぬ」とあるが、誰の生涯が終わっ

たのか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 賊 イ 禪師 ウ 童子 エ 来れる人

問四 ——線部4「畜生すら猶し恩を忘れずして恩を返報

せり」とあるが、何がどのような行動をとったことを表しているのか。具体的に説明せよ。

